まい あーと●臈纈染「ニコライ堂」by 堤 俊子

EKUTEBIAN PHOTO LIBRARY

多摩川の鳥

PHOTO by 原田孝一

先月のテンに続いて、今回は鳥たちの美しい姿をお届けしよう。場所は多摩川。撮影者の原田孝一さん（羽衣町2丁目）は生まれも育ちもキッスイの「立川人」。美しいものを視る眼をもっていれば、美しさをこんなに豊かに表現できるのだろうか。主婦の友社から『多摩川の鳥』が出、さらにフランス、オランダでも評価が高く海を渡って写真展を開く羽ばたき様。

立川の湧水

羽衣町に流れる清流、矢川。その源泉を探る。

湧き出る清水

立川に唯一、湧き出した清水によって出来た川がある。これが矢川である（羽衣町三丁目）。

昔、この川では〝山葵(わさび)〟を栽培し育てていたという。しかし、今日にいたってはその形跡を見ることはできない。

流れる水のきれいさのあかしてあるかのように、川なずな（刺身などのツマに使われる高級な品）が群生し、他にも川芹などもみることが出来るのである。

野草ばかりでない、ここにはザリガニやアメンボ（地元ではオカマというそうだ）をはじめとして、ウナギ・フナ・コイ・ハヤ・ヤマメなどの魚から、キジ・カワセミ・ヨシキリ・セキレイ・コサギといった鳥たちが生ている。まさに、矢川は自然が豊かに息づく川なのである。

しかし、この自然も心ないものによって崩されようとしている。空カンやゴミが捨てられたり、雑木などが投げ入れられ、さらさらと流れている川がせきとめられ、藻(も)の繁殖によって水は汚れ虫がわいたりという状態になってきている。

今や源泉には家がたち並んでいる

そんな川をみかねてか、近くに住む石井晋さん（羽衣町3丁目）は自主的に川の清掃をされている。

「あの石によくセキレイなんかがとまって鳴くと周りに響いてとってもきれいなんだよね」とは、矢川を愛する石井さんの談である。

源泉を求め溯(さかのぼ)っていくと道路に突きあたる、下に暗渠（あんきょ）が見え、ここから約100m程いった所に、昔はまる池があったという。周りには篠が生い茂り、牛車が通れる程度の道が国立へ伸びていたようである。

いまや源泉であった池のあたりには家が建ち、その様子をうかがうことは出来ない。しかし、キラキラと立川段丘から湧きだした水は、源泉周辺からいまだ清流矢川に注がれている。

このあたりは至る所から水が湧いてくる

写真集『多摩川の鳥』刊行

14年に亘る鳥たちとの語らいが今、写真集になった。

雨風のなかに撮りつづけて14年。

鳥たちの表情が快く伝わってくる写真集です。この立川を流れる多摩川にも、これほどの鳥たちが飛来してきているということがよくわかる一冊です。

発行／オリジン社
発売／主婦の友社

漢字テスト㉘

空欄に一字挿入を試みよ。

百■繚乱
春日■遅

表紙は語る

「蠟纈染(ろうけつぞめ)で描いたニコライ堂の風景なんですけど、前に一年ほど入院をしまして、病室からちょうどこんな様子が見えてね。まあ、昔から絵が好きで学校も女子美に入り、日本画の山本丘人先生について習いまして。そんなこともあって、四季折々のニコライ堂や花のスケッチを描きためていました。

6年前から蠟纈染を習いはじめまして、入院の時に描いた「ニコライ堂」を染めたのがこれです。蠟纈染は一度蠟をたらすと、そこには色がつかなくなる。ごまかしがきかず、細やかさと緊張感がとても新鮮で楽しい仕法ですが、描き上げたあとは大変疲れるけどね。」と語る堤復子さん。

真如苑だより

とある幼稚園の前を通ったら子供たちが手づくりの兜をかぶって遊んでいました。新聞紙の兜に刀。思い出しませんか。幼かったあの頃……。

爽やかな風の季節、心も軽くお出かけ下さい。

■日時　5月21日(土)
　午後2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

漢字テスト・こたえ

百花繚乱（ひゃっかりょうらん）　花がいろとりどりに咲き乱れているさま。美人がいっぱいのたとえにも。

春日遅遅（しゅんじつちち）　春の日はのどかで長く、暮れるのも遅い、の意。〝春日〟は春の太陽のこと

立川駅長列伝 ⑤

中野　明

二一代駅長／高田　文夫
（昭和三十年十月―昭和三二年二月）

高田氏の思い出は尽きない。

立川駅構内の官舎に住んでいた高田駅長は夕食を済ませると、私服のまま、駅舎に顔を見せるのが常だった。晩酌の酒がいつになく美味しく感じられたある晩のことである。ホロ酔い気分で、いつものように駅舎に立ち寄ってみると、通りすがりの酔っぱらいが、「駅長を出せ！」と管を巻いていた。質の悪い酔っぱらいのことである。難癖をつけて、小銭をせびりに来たのであろう。高田駅長は内心、困ったなと思いつつも、ある考えがひらめいた。高田駅長自身、酒が入って顔が赤みがかっていたのを良いことに、その酔っぱらいに向ってこう言った。「俺が先に、駅長に用事があって来てるんだ。おまえは、俺の次だぞ。」するとその酔っぱらいは、「そうか、じゃあ、後はよろしく頼む」と、一言だけ告げて夜の街へ消えた。その直後、高田駅長をはじめ、職員たちが、お腹を抱えて大笑いしたのは言うまでもない。

昭和三十年十月、首都の人口は八〇〇万人を記録し、その八分の一が多摩地区に集中していたことから、既に〝通勤地獄〟が始まっていたことが容易に想像できる。事実、駅舎は昭和六年に建てられた時のままで、ほとんど拡張もされず、一日に十五万人もの利用客をさばかねばならなかった。昭和六年設立当初は一万人程度の利用客であったが、昭和三十年には、十五倍にも膨れ上がり、旧態依然の駅の設備では、ラッシュ時に対応できなくなっていた。特に、北口と南口を結ぶ地下通路の混雑はひどかった。

青梅線との直通運転を望む声も高まっていたが、拝島―青梅間の単線区間がネックとなり、複線化を待たねばならなかった。

昭和三十七年、高田氏は高崎鉄道管理局営業部長を最後に、勤続四十年の国鉄を定年退職した。

立川駅長在任中、最もこころに残る思い出はと言えば、米軍基地の司令官から、クリスマスパーティーに招待されたことだという。

かつて、米軍基地への物資輸送を一手に引き受けていた「立飛」への引込線も、立川基地返還後は、その機能を失ない、廃止された。現在、その線路跡の一部は道路と化し、わずかに残されたレールは赤錆て、雑草が生い茂るに任せている。今となっては、鉄道と立川基地との係わりを静かに物語る遺跡となってしまった。

※写真はお召し列車の通過を警護する、当時の高田駅長。駅長にとって最高の栄誉であり、もっとも緊張する一瞬である。

?・立川クイズ

立川駅～西立川駅間、東京発青梅行きの電車は4分かかり、立川発は3分で到着。なぜ？

東京発の電車は①ポイント切り換えに時間がかかる。②大きく迂回して青梅線に入るため。③規則で速度を落している。

〔4月号の答〕 ㋩

国営昭和記念公園は完成すると日比谷公園の約11倍、国際的にも都市公園としては有数の規模になります。

福祉の若葉もゆる春

第1回福祉まつり開催

去る3月26・27日、晴れわたる空のなか、中央公民館（柴崎町）にて『第一回福祉まつり』が開催された。

前年までは善意銀行（思いやり・善意の窓口）としてのバザーが行なわれていたが、立川市が東京都から『ボランティアのまちづくり推進事業』の指定を受け、従来の善意銀行が発展的拡大され、今回の開催となった。

運営にあたっては、立川市社会福祉協議会が中心となり、市内30のボランティアグループと諸団体が一つとなり、新たな福祉活動の場をつくりあげていた。

工房から

●立川にもこんなにコンコンと湧きでる水があるとは思いもよりませんでした。先日、羽衣町2丁目に住む佐伯政雄さんに、矢川の話を聞くうち湧水があることを知り、さっそく現地に案内していただいた。この矢川には清水が流れているために、自然が豊かに息づいていました。少しでも矢川の自然が伝わればと思います●立川市福祉協議会が中心となり、30のボランティアグループが中央公民館に結集。「第一回福祉まつり」が盛大に行なわれた。〝来年はもっと展示に力をいれたい〟と語る渡辺さん●あまりの寒さに目をさましてみると外は雪景色。4月としては明治以来の大雪。桜の花に雪が舞う光景は、まさに絶景です●春園に　憩うおのづと　えくてびあん

（編集）石輝敦美　小川知子　神山清子　風川理　田中恵子　沼上麻里　平沢正弘　原田悦子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治
スタジオ269

月刊えくてびあん　第46号
昭和六十三年五月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング　3F
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

看板娘

あのこかわいや●立川・11

「いらっしゃいませ」明るい声が店内に弾んでいる。スピードと正確さが身上のハードな仕事を笑顔でこなす彼女たち。キビキビとしていつもにこやかな応対はさすが銀行のはつらつ〝看板娘〟であります。

富士銀行（立川支店）岡崎真由美さん

太陽神戸銀行（立川支店）高木ひとみさん

山梨中央銀行（立川支店）萱沼順子さん

協和銀行（立川支店）谷合みちよさん

東京都民銀行（立川支店）三上奈津子さん

三菱銀行（立川支店）平賀美砂子さん

多摩中央信用金庫（本店）山崎はるみさん

埼玉銀行（立川支店）大山明美さん